

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：シン エヴァンゲリオン 劇場版

その 15

今回のテーマ

シンジのエディプスコンプレックスそして仲間達の魂の救済

前回のおさらい

シン・エヴァンゲリオンのプロローグ

シンジは『シン・エヴァンゲリオン』に至るまで、綾波レイを始め、様々な喪失に直面し、そのことをなかなか受け入れられず、どうにか元の状況に戻そうともがく中で、厄災を招いてしまう。前作『エヴァンゲリオン Q』において、自身がニアサードインパクトやフォースインパクトの引き金を引き、周囲に多大な被害を与えてしまった張本人であることに直面し、シンジは深い絶客感から抜け殻のようになってしまう。

この心性は、メラニー・クラインが乳児の心の世界を描いたもので、乳児は乳房がないということを受け入れられず、悪い乳房があると捉え、良い乳房を取り返そうと攻撃してきたが（妄想分裂ポジションの心性）、良い乳房も悪い乳房も同一であることに気がつき、取り返しのつかないことをしでかしてしまったと罪責的な思いになり、償いや思いやりの心を持つようになる（抑うつポジション）と述べている。その心性の変化に照らし合わせると、この時のシンジの心状態は、妄想分裂ポジションから抑うつポジションへの移行途中にあると言える。

シンジの心性を抑うつポジションへと押し進めた環境

そこから『シン・エヴァンゲリオン』は始まったが、絶望に瀕したシンジの心を抑うつポジションを進展させていくには、彼の存在を抱えていく環境が必要不可欠である。そこに寄与したのが、シンジの同級生だったが14年経ち成熟し大人になったトウジ、ケンスケをはじめとした第三村の人々である。彼らとの温かい交流を経てシンジの心は回復し、希望を持つ（抑うつポジションの醸成）。

その後、綾波の死という悲劇に見舞われるが、その出来事によりシンジが依存してきた人間関係から離れ、自らの力で生きることの大切さを悟るきっかけとなり、シンジは再びヴンダーに乗り込み、父との対峙を決意する。つまりシンジは自身のエディプスコンプレックスに向き合う覚悟を決めたのである。

シンジと父との対峙 父殺し

シンジとゲンドウはエヴァに乗って戦うが、シンジはゲンドウに全く敵わない。そこで、ゲンドウは「暴力と恐怖は、我々の決着の基準ではない」と告げる。そこで彼が告げた意味は、現実的に父を倒すことではなく、自身の内的な父親像を乗り越え、現実で父的な存在に恐怖を抱かず、お互いを深く理解し、認め合い、対等な存在でいられるようになることである。

ここで、シンジは、「うん。父さんと話がしたい」という。この言葉には、父親の真意を深く理解したいという思いが込められている。

それはシンジの強い覚悟を示す言葉であるように感じられる。なぜなら「父ゲンドウが母のユイやゲンドウ自身に夢中でシンジ自身には関心がなかった」というこれまでシンジが決して受け入れられなかった事実に直面する可能性があ

るからである。しかし相次ぐ喪失に心を痛めながらも受け入れ、成熟したシンジには、それを受け入れる強い覚悟を持ち、父親との関係を深く掘り下げ、自らの存在意義や父親の本当の姿を明らかにしようとしている。

父との対話 アディショナルインパクトを起こしたゲンドウ

ゲンドウは「A・T・フィールドの存在しない、全てが等しく単一な人類の心の世界。他人との差異がなく、貧富も差別も争いも虐待も苦痛も悲しみもない、浄化された魂だけの世界。」という理想的世界を作り出すために、これまで人類補完化計画を推し進め、ゲンドウは人間を捨てて神の存在となり、アディショナルインパクトを起こした。しかしそれは所詮、妻ユイの死という悲しみを受け入れられない故の躁的な誇大妄想の世界である。これら一連の行動は喪失を拒否し、一つに融合させることで、ユイとの再会を叶えようとする、いわばゲンドウの心性は分離个体化を拒絶した「肛門期の固着」の状態と考えられる。

父ゲンドウの心性「肛門期の固着」から贖罪と成長へ

幼少期からゲンドウは人と深く関わることができず、孤独であった。ユイとの

出会いはそれを変えてくれたが、程なくして彼女は亡くなってしまい、彼は深い傷跡を残した。しかしその悲しみは強く、彼の心をきちんと受け入れられる人は誰 1 人としていなかったと考えられる。シンジは第三村の人々に抱えられて、成熟に向かったが、その点がゲンドウとシンジとの間で大きく異なる点である。そしてゲンドウ自身を見捨てたシンジが唯一、成熟したのちにゲンドウの孤独と悲しみを理解し、彼を責めることなく、温かい眼差しを向け、受け入れていく。

ゲンドウはこれまでシンジのことを単なる「手段」と考え、拒絶してきたが、息子を愛せない自分自身を深く悔み贖罪の念を抱く。そしてミサトから託されたガイウスの槍を手にしたシンジの姿を見て、ゲンドウは息子が成長したことを実感する。つまりゲンドウは現実をようやく受け入れたのである。

シンジの姿を再認識する中で、彼は初めて、シンジを自分とユイとの息子であると受け入れ、ゲンドウは

「そうか、そこにいたのか——ユイ」

と言ったと考えられる。

ここで、ゲンドウの心性は、妄想分裂的ポジションから、抑うつ的ポジションへと変化である。彼はユイの喪失を受け入れ、シンジの中にユイの姿を重ねるこ

とで、彼はようやく心の安らぎを見出したと考えられる。

そして父はトボトボと電車から降りていく。

ここでシンジは父が自分と同じことを悩み苦悩する、愛おしい一人の人間なんだと気づいたと考えられる。父親が電車から降りたということは、もうシンジにとって強大な自身を圧倒する様な父親ではないと感じられる様になったことを意味しているように感じられる。そしてそれこそが、シンジの心の中での父親殺しになった（父を乗り越えた）と考えられる。

アスカ、カヲル、綾波の魂の浄化

父との深い交流を経て、エディプス葛藤を乗り越え、心的にシンジは成熟したと考えられる。シンジは、その後、亡くなってしまったアスカ、カヲル、綾波の魂の救済の作業に乗り出す。

シンジ自身は父と同じ様に彼ら彼女らと深く情緒的に関わる中で、彼ら彼女らの抱えてきた心の問題が見えてくる。

1) アスカの場合

アスカは、独白の中で自身の過去を語り始める。両親のいない孤独な世界で生きてきた。「誰もいなくていいようにする。そうしないと辛いから。生きているのが苦しいから」という言葉に象徴されるように彼女は傷つくことを恐れ、自己愛的な殻に閉じこもってきた。「お前バカァ？」というアスカの常套句は、周囲から決してそう言われぬように必死に努力してきた証である。彼女は、孤独を感じながらも、自分の弱さを認めず、常に強がって見せていたのだろう。これは、まるでヤマアラシのジレンマであり、近づきたいのに近づけず、結果的に相手を傷つけてしまう状態のシンジの心性と重なる部分がある。

2) カヲルの場合

カヲルは、シンジの幸せを願う理由として「僕も君と同じなんだ。だから君に惹かれた。」という言葉が示すように、カヲルは自身の内なる心の痛みをシンジに投影し、シンジを幸せにすることで、間接的に自分の心を癒そうとしていた。これはまさに、他者の世話をする「ケアテイカー」の心理と言える。

カヲルは「僕は、定められた円環の物語の中で、演じることを永遠に繰り返さなければならない」と告白する。彼は、宿命の中で偽りの自分を演じ続け、孤独を感じていたと考えられるが、この関係性を断ち切るためには、シンジが自立し、カヲルの心を理解し、受け入れ、お互いが補い合う関係性が不可欠と考えられる。

幼いシンジとの出会いのシーンで、カヲルは「相補性のある世界を望む」と言うが、それはまさに先ほどのことを言い表していると考えられる。

そして、シンジにとってのカヲルの役割は終わりを告げる。シンジはカヲルの喪失を受け入れ、新たな一步を踏み出したと言える。

3) 綾波の場合

綾波もカヲルと同じように「エヴァに乗らない幸せ。碇君にそうして欲しかった」と言ったように、ゲンドウやシンジに尽くすかのように生き、カヲルのように「ケアテイカー」の役割を担い、主体性が確立できていなかった。シンジは「もう一人の君は、ここじゃない居場所を見つけた。」と言ったが、「もう一人の君」

とはシン・エヴァに出てきた綾波で彼女は主体性を形成し、亡くなった。そしてシンジは綾波に主体性の確立を促しているように感じられる。それは、これまでシンジと綾波が一心同体であったが、共に成長し、分離を受け入れ、お互い独立し、個を持ちながらもお互いが補い合う関係性（相補性のある世界）へと変化していくことを意味する。つまりそれが「世界の新たな創生、ネオン・ジェネシス」である。

そしてシンジはガイウスの槍を握りしめ、「ネオン・ジェネシス」の儀式が行われる。

さよなら、全てのエヴァンゲリオン

シンジが「ネオン・ジェネシス」を果たそうとするために自身のエヴァの首にガイウスの槍を刺そうとする直前に、誰かの手で差し止められ、抱えられたのちに、その槍からシンジを遠ざける様にシンジの背中を押す手が描かれる。

シンジが振り向くと綾波に似た女性の姿が映し出される。そこでシンジが気付く

シンジ「綾波？ いや、違う。そうか、この時のために、ずっと僕の中にいたんだね。母さん」

そしてエヴァが二つになり、一方が後ろから抱かれて、もう一方が両手を広げて槍を刺される準備をしている。その後シンジに父ゲンドウが背後から母を抱き母は幸福そうな笑みを浮かべている。

シンジ「やっと分かった。父さんは、母さんを見送りたいかったんだね。それが父さんの願った、神殺し」

次々とエヴァンゲリオンをガイウスの槍で次々と突き刺されていく。

シンジ「さようなら。全てのエヴァンゲリオン」

そしてそのことが新しい世界を切り開いていく始まりとなっていく。エヴァンゲリオンは様々な老若男女や動物に変わっていき、これまで真っ白だったものが様々な色の色彩を持ち始める。

【考察】

シンジは意を決してガイウスの槍を自分に刺し、ネオン・ジェネシスを引き起

こそうとするが、それを母によって阻止される。これは、ゲンドウが「暴力と恐怖は、我々の決着の基準ではない」と語った言葉と重なるように思える。新しい世界を興すことは、現実的に自らを殺し変えることではなく、内面的にすがってきた母に別れを告げ、一人の人間として自立していくことなのではないだろうか。

その後、ゲンドウとユイが幸福そうな笑みを浮かべているシーンは、フロイトの言う原光景を彷彿とさせる。シンジはそこから離れ、「神殺し」の意味を知る。それは、シンジがこれまで様々な親子関係の葛藤を乗り越え、独立し、一人の大人へと成長していく過程を描いているように思われる。

シンジは、これまでの人々との出会いの中で、もがき苦しみながらも、妄想分裂ポジションから抑うつポジションへと移行し、自らの生きるべき道を見つける。そして、父と対峙し、エディプス・コンプレックスを乗り越え、傷ついた父を受け入れ、世代間の因習を断ち切ることで、新たな人生を歩み始める。

だからこそ、モノトーンだった世界が、多種多様でいきいきとした色彩に満ち溢れたものになったのではないだろうか。

この変化こそが、新劇場版エヴァンゲリオンが描く「ネオン・ジェネシス」と考

えられる。

今一度、これまでの新劇場版エヴァンゲリオンの作品を振り返りながら、その点について考えていきたいと思う。

シンジは幼少期に母を亡くなり、父にも見捨てられ、不遇な環境で育った。そのため、十分に養育者（象徴的に母とも言える）に抱かれた感覚を持たず、周囲の世界を敵対的に捉え、自己愛的な殻に閉じこもっていた。

「序」で「エヴァンゲリオンは情緒的に深く関わる母のような存在。」と述べたが、エヴァンゲリオンを人類創生における「アダムとイヴ」のイヴと考えると、イヴは神によってアダムの孤独を解消するために作られた存在である。同様に、シンジにとってエヴァンゲリオンは、苦しみながらも現実世界（外的世界）との交流を助ける存在だったのかもしれない。それは、シンジにとって潜在意識における移行対象とも言えるだろう。そして、エヴァンゲリオンのパイロットとなったシンジは、綾波との交流を通じて、思春期の心の成長に伴う情緒的な葛藤を経

験し始める。

「破」では、シンジは綾波やアスカとの交流を深め、和やかな関係を築くようになる。しかし、その幸せは長く続かず、相次いで愛する者を失う。シンジは、これらの喪失を受け入れられず、失った者を救い出したという幻想に固執し（妄想分裂ポジション）、その躁状態のような心の状態でニアサードインパクトを引き起こしてしまう。

シンジが引き起こしたニアサードインパクトは、周囲の人々に大きな苦しみをもたらした。しかし、この行動は、シンジが心の奥底に隠していた悲しみや苦しみを無意識に爆発させたものだったと言える。

「Q」では、シンジはこれまで逃避してきた喪失の痛みと再び向き合うことになる。カヲルと出会い、彼とのピアノ連弾を通じて深い情緒的な交流が生まれたことにより、シンジは現実を直視し、深い心の痛みを経験することとなる。しかし、シンジが現実を受け入れ、自身の喪失と罪を受け入れ、彼の心が抑うつポジションに移行し成熟するまで、カヲルは彼の気持ちを理解し、受容し、待つこと

ができなかった。カヲルの提案にシンジは盲信し、再び妄想分裂ポジションに退行し、躁的心性になり、破で綾波を助けようとした時と同じ過ちを繰り返してしまふ。

同じ過ちを繰り返したシンジは、深い絶望感に打ちひしがれ、再び心を閉ざしてしまう。しかし、今回は単に周囲を迫害的に捉えるのではなく、自責の念と贖罪の念に苦しんでいた。新劇場版では、成長したトウジやケンスケ、そして新しい綾波との交流を通じて、シンジは徐々に心を開いていく。そして、村の人々との関わりの中で、再びヴァンダーに乗り込む決意をし、父と対峙する。シンジは、これまで強く、自身が押しつぶされそうになっていた父親像から解放され、父もまた自分と同じように悩み、苦しむ一人の人間であることに気づく。こうして、エディプス・コンプレックスを乗り越え、新たな人生を切り開く決意を固める。この決意こそが、「ネオン・ジェネシス」と言えるのではないだろうか。

～エピローグ～

ふと目覚めたとき、シンジは駅のホームのベンチに座っていた。

そして背後から誰かに目隠しされる。

マリ「だーれだ」

シンジ「胸の大きい、いい女」

マリ「御名答」

マリは首筋に鼻先を近づけた。

マリ「相変わらずいい匂い。大人の香りってやつ？」

シンジ「君こそ相変わらず可愛いよ」

マリ「ほほう、一端の口を利くようになっちって」

彼女は、そこに残っていたD S S チョーカーを自然な手付きで外すと、指先で

くるりと回してからジャケットのポケットに入れた。

マリ「さあ、行こう。シンジ君」

シンジは女性が差し伸べた手を握り返して、引いた。

シンジ「うん。行こう！」

二人は階段を駆け上がっていき、物語は終わる

【考察】

このシーンでシンジやエヴァを操作していた時とは少し歳を経ている。そして彼の服装も背広を着ており、成長し、成人になっている。

そこで、マリとのやりとりもシンジは「胸の大きい、いい女」というなど、以前の奥手なシンジとは思えないウィットの効いた発言をしている。だからこそマリは「大人の香り」と言い、それに対してもウィットに返し、ある種大人のやり取りをしている。

シンジのその姿は自信に溢れ、イキイキとしている。エヴァに乗ることを通じてエディプス葛藤を乗り越え、成熟した様を描いている様に考えられる。

そしてシンジはマリが手を繋いで「行こう」と言い階段を駆け上っていく。まさにシンジの新しい人生の始まりを象徴している終わり方である。

Q において、カヲルは亡くなる前に「シンジ君は安らぎと自分の場所を見つければいい。縁が君を導くだろう」と非常に抽象的で宗教的とも言える発言をした。このシーンこそが、シンジにとって真の安らぎと自分の場所のように考えられる。シンジはこれまで、良好な人間関係を築くことができず、自己愛的な殻に閉じこもっていたと考えられる。しかし、様々な人との出会いを通して成長し、自信に溢れ、生き生きとした姿を見せるようになった。これはまさに、カヲルの

言葉が示唆していた「安らぎと自分の場所」を見つけるための第一歩と言えるだろう。

これでエヴァンゲリオンの考察は終わるが、このエヴァンゲリオン四部作はシンジの心に傷を負った思春期の人たちがどの様に心の成長を遂げていくのかを克明に描いた一大叙事詩と言っても過言でもない様に感じられる。